

線形代数学第 2 中間試験 - 解答例 -

1. ベクトル $a, b, a - b$ が作る三角形において余弦定理を適用する。

$$\|a - b\|^2 = \|a\|^2 + \|b\|^2 - 2 \|a\| \|b\| \cos \theta \quad (1)$$

左辺を内積で表して展開する。

$$\begin{aligned} \|a - b\|^2 &= (a - b)^T (a - b) \\ &= a^T a + b^T b - 2a^T b = \|a\|^2 + \|b\|^2 - 2a^T b \end{aligned} \quad (2)$$

これを余弦定理の左辺に代入して整理する。

$$a^T b = \|a\| \|b\| \cos \theta \quad (3)$$

これより,

$$\cos \theta = \frac{a^T b}{\|a\| \|b\|} \quad (4)$$

が成り立つ。次に,

$$|\cos \theta| \leq 1 \quad (5)$$

であるから, 次の Schwarz の不等式が成り立つ。

$$|a^T b| \leq \|a\| \|b\|$$

2. 3 点を y と $\cos t$ に代入する。

$$\begin{aligned} C + D &= 2 \\ C + 0 \times D &= 3 \\ C - D &= 5 \end{aligned} \quad (6)$$

行列の形で表すと次のようになる .

$$\begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 0 \\ 1 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} C \\ D \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \\ 3 \\ 5 \end{bmatrix} \quad (7)$$

この方程式を $Ax = b$ とすると , 最小 2 乗解は $\bar{x} = (A^T A)^{-1} A^T b$ で与えられる .

$$A^T A = \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix} \quad (8)$$

$$(A^T A)^{-1} = \begin{bmatrix} 1/3 & 0 \\ 0 & 1/2 \end{bmatrix} \quad (9)$$

$$\begin{bmatrix} C \\ D \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1/3 & 0 \\ 0 & 1/2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 \\ 3 \\ 5 \end{bmatrix} \quad (10)$$

$$= \begin{bmatrix} 10/3 \\ -3/2 \end{bmatrix} \quad (11)$$

最小 2 乗近似の式は次のようになる .

$$y = \frac{10}{3} - \frac{3}{2} \cos t \quad (12)$$

グラフは別に示す .

3. b_1 はベクトル b からベクトル a 上への射影である .

$$b_1 = \frac{a^T b}{a^T a} a = 0 \quad (13)$$

従って , b は a に直交している .

$$b_2 = b - b_1 = b = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix} \quad (14)$$

また , $b_1^T b_2 = 0$ であるから , これらは直交している .

(注) 問題としては , $b_1 = 0$ とならない方が適切である .

4. Gram-Schmidt の直交化法を利用する .

$$\mathbf{v}_1 = \mathbf{a}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} \quad (15)$$

$$\mathbf{v}_2 = \mathbf{a}_2 - \frac{\mathbf{v}_1^T \mathbf{a}_2}{\mathbf{v}_1^T \mathbf{v}_1} \mathbf{v}_1 \quad (16)$$

$$\mathbf{v}_1^T \mathbf{a}_2 = 0 \quad (17)$$

$$\mathbf{v}_1^T \mathbf{v}_1 = 2 \quad (18)$$

$$\mathbf{v}_2 = \mathbf{a}_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix} \quad (19)$$

$$\mathbf{v}_3 = \mathbf{a}_3 - \frac{\mathbf{v}_1^T \mathbf{a}_3}{\mathbf{v}_1^T \mathbf{v}_1} \mathbf{v}_1 - \frac{\mathbf{v}_2^T \mathbf{a}_3}{\mathbf{v}_2^T \mathbf{v}_2} \mathbf{v}_2 \quad (20)$$

$$\mathbf{v}_1^T \mathbf{a}_3 = 2 \quad (21)$$

$$\mathbf{v}_2^T \mathbf{a}_3 = -1 \quad (22)$$

$$\mathbf{v}_2^T \mathbf{v}_2 = 3 \quad (23)$$

$$\mathbf{v}_3 = \mathbf{a}_3 - \mathbf{v}_1 + \frac{1}{3} \mathbf{v}_2 = \begin{bmatrix} -2/3 \\ 4/3 \\ 2/3 \end{bmatrix} \quad (24)$$

5(a) 行列 \mathbf{A} の固有値を λ_i とすると次の恒等式が成り立つ .

$$\det(\mathbf{A} - \lambda \mathbf{I}) = (\lambda_1 - \lambda)(\lambda_2 - \lambda) \cdots (\lambda_n - \lambda)$$

これは λ に関する恒等式であるから , $\lambda = 0$ と置くことにより ,

$$\det \mathbf{A} = \lambda_1 \lambda_2 \cdots \lambda_n$$

を得る .

(b) 上の恒等式では $(-\lambda^{n-1})$ の係数が固有値の和になる . 次に , 固有値を計

算する行列式について考える .

$$\det(\mathbf{A} - \lambda \mathbf{I}) = \begin{vmatrix} a_{11} - \lambda & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} - \lambda & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} - \lambda \end{vmatrix} \quad (25)$$

行列式は、行列の各行及び各列で 1 個のみの要素が選択され、それらの積の和として求まる . 従って、上式で $(-\lambda)^{n-1}$ の項が現れるのは対角要素の積になる .

$$(a_{11} - \lambda)(a_{22} - \lambda) \cdots (a_{nn} - \lambda) \quad (26)$$

この項で $(-\lambda)^{n-1}$ の係数は $a_{11} + a_{22} + \cdots + a_{nn}$ となり、固有値の和と等しくなる .

6. 行列 \mathbf{A} の第 i 行 \mathbf{a}_i を k 倍して第 j 行 \mathbf{a}_j に加えた行列を \mathbf{B} とする . 従って、 \mathbf{B} は \mathbf{A} の第 j 行を $\mathbf{a}_j + k\mathbf{a}_i$ としたものである . \mathbf{B} の行列式に性質 1 を適用する . すなわち、第 j 行に関する線形性より、

$$\det \mathbf{B} = \det \mathbf{A} + k \det \mathbf{B}' \quad (27)$$

ここで、 \mathbf{B}' は \mathbf{A} において第 j 行を第 i 行で置き換えたものである . 従って、第 i 行と第 j 行は等しく、性質 4 より、 $\det \mathbf{B}' = 0$ となり、

$$\det \mathbf{B} = \det \mathbf{A} \quad (28)$$

が証明できる .

- 7(a) \mathbf{A} についてガウスの前進消去を行う .

$$\det \mathbf{A} = \begin{vmatrix} 2 & -5 & 0 & -1 \\ 1 & -2 & 3 & -4 \\ 1 & 0 & -1 & 0 \\ 2 & -3 & -4 & 3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 2 & -5 & 0 & -1 \\ 0 & 0.5 & 3 & -3.5 \\ 0 & 0 & -16 & 18 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{vmatrix} = 0 \quad (29)$$

(b) 行列 B は下三角行列であるから，その行列式は対角要素の積である．

$$\det B = 2 \times (-1) \times 5 \times (-2) = 20 \quad (30)$$

(c) 行列 C は第 1 行と第 3 行が同じであるから，行列式は 0 である．

(d) 行列 D の第 2 行は零であるから，行列式は 0 である．

8. 4×4 行列 A の階数が 3 であることは， A が特異行列であることになり，その行列式は 0 である．

(別法) 行列 A をガウスの前進消去を行ったときに零でないピボットの数
が階数であるから，階数 < 4 であることは，ガウスの前進消去後の行列で零
になる行が現れ，行列式は 0 となる．